

宇和島市内病院のがんへの対応

1年2組 伊山明日香 1年2組 濱田 花菜
1年3組 稲井 風香 1年3組 岡田ひろみ
1年3組 蔵谷さくら 1年3組 薬師神実花
指導者 山下 孝文

1 課題設定の理由

現在、日本人の三大死因の第一位はがんである。食生活や生活習慣の欧米化などが関係していると考えられる。がん発症患者に対する医療関係者の接し方や治療について宇和島市内の医師や看護師に直接話を聞きたいと思い設定した。

2 仮説

抗がん剤や手術による治療を行い、臨床心理士が心のケアをしているのではないだろうか。

3 研究の方法

病院訪問を実施し、市立宇和島病院、JCHO 宇和島病院（外科）院長先生、婦長さん、看護師さんへのインタビューを行い、治療についての説明を受けた。

4 結果と考察

(1) 薬による治療

ア 分子標的薬について

分子標的薬とは、がん細胞のもつ特異的な性質を分子レベルでとらえ、それを標的として効率よく作用するように作られた薬である。副作用を少なく抑えながら治療効果を高めることができ、抗がん剤特有の副作用、髪が抜けるなどの症状がないのが特徴である。

イ 抗がん剤について(オプジーボ)

まったく新しい機序の抗がん剤であり、競合する薬がまだない。開発費用が莫大だった(新薬のため)。極めて稀な(患者の少ない)がんに対する治療薬として発売した。大勢に使用できれば相対的に安くなるが、治療の対象とされているがんの種類が限られているため、極一部の患者にしか使用できない。販売当初適応は、国内で皮膚がん(メラノーマ)の患者約500人であった。人間の免疫細胞自体を調整するオプジーボは、免疫細胞の過剰な動きを止める停止ボタン(PD-1)に蓋をしてしまう薬である。免疫細胞が活発に動くため、がんに対する効果も期待できるが自分自身の細胞も攻撃してしまう。よって、副作用が出る。免疫細胞(T細胞)には、がん細胞の死を誘導するプログラムがある。T細胞表面には、そのプログラムを停止するボタン(PD-1)が存在し、がん細胞には、そのボタンを押す突起がある。T細胞表面の停止ボタン(PD-1)に蓋をすることで、ボタンを押せなくなるというしくみになっている(抗PD-1抗体、これがオプジーボ)。市立宇和島病院ではこのオプジーボを使用している。肺がんにも使用適用が拡大されたため、現在は主に肺がん患者に使用されている。

(2) 心のケアについて

がんを宣告された患者は、鬱の症状を発症したり、絶望感や不安で一人では治療に耐えることができないため、主治医や家族、看護師が丸となり、患者をチームで支える。

患者が不安を抱えたまま手術することはできないため、1人にしないことを第一に考えている。心のケアの専門職である臨床心理士は、少ないのに対し、患者は多いため、手が回らないのが現状である。医療従事者が主となって支えているという認識が強いが、実際はそうではなかった。

(3) 手術について

市立宇和島病院で院長先生に手術の実際の映像をみせてもらった。腹腔鏡手術の映像であった。腹腔鏡手術は傷が小さく済むため、患者の負担も軽くなり、早く退院できる。道具として、電気メスやレーザー、鉗子類を使っていた。

5 まとめと今後の課題

がんは治りにくいというイメージがあったが、分子標的薬やオプジーボなどの最新の治療薬が宇和島市内病院でも使用されており、患者の治療に臨床心理士だけでなく看護師の方々や主治医の先生もチームワークをもって支えていることが分かった。今後の課題としては、患者さん自身の話を聞いてがんについてより理解を深めていきたいと考えている。

参考文献

特になし。